

滴静注が著効を示した。症例3に対してはPGE1による点滴静注が有効であると思われた。

【考察】毒ささこによる激痛発作には麻酔科的治療以外には有効な手段はない。上記治療が有効であったことより、交感神経緊張による血管収縮が激痛発作に関与していると思われた。

21 当院における乳癌末期患者に対する麻酔科的疼痛治療の検討

高田 俊和・丸山 洋一・高橋 隆平
海老根美子

新潟県立がんセンター新潟病院麻酔科

乳癌末期患者20例に麻酔科での疼痛治療を施行した。麻酔科受診時、多発脊椎転移16例・肝肺転移8(12)例があり腰下肢痛15例・体動時痛14例等を訴えた。平均モルヒネ投与量37mg/日、平均ジクロフェナク78mg/日(18例)に加え抗不安薬・制吐剤等が投与されVAS 7.8±0.4と高かった。受診後フェンタニールパッチ4例・リン酸コデイン6例、平均ジクロフェナク88mg/日(9例)に加え抗うつ剤・Naチャンネル阻害剤が投与されVAS 6.6±0.7(P<0.01)と有意に低下したが著効に致らなかった。本疾患では多発脊椎転移・肝肺転移・NSAIDsの頻用・長期化学療法(平均40ヶ月)に伴う造血機能低下を認め薬物鎮痛療法が主体であったが、鎮痛薬・鎮痛補助薬の変更により疼痛改善を計り加えて治療の工夫が必要と考えられた。

22 開業五年 忘れられない五症例

穂苅 環・穂苅 豊

ほかり医院

新津市で整形外科医の夫と一緒に、内科、麻酔科を標榜して開業し、丸五年が過ぎ、今までに印象に残った五症例を報告する。

腰痛患者で、副甲状腺機能亢進症が見つかったケース。リウマチ因子が陰性だったが、徐々に典型的な慢性関節リウマチになったケース。転倒後の上腕痛から悪性腫瘍の頸椎転移が疑われたケー

ス。多彩な痛みの訴えから、脊椎転移の発見が遅れたケース。椎間板炎による急性腰痛症。以上の五例である。

今後も整形外科と十分な症例検討を行ない、正確な診断と適切な治療により、地域医療に貢献していきたいと思う。

23 当院ICUにおけるエラスポール®の使用経験

肥田 誠治・大橋さとみ・本多 忠幸
遠藤 裕・小村 昇*・山本 智*
風間順一郎*

新潟大学大学院医歯学総合研究科器官
制御医学講座救命救急医学分野
新潟大学附属病院集中治療部*

2002年7月から2002年11月までに新潟大学医学部附属病院ICUで、Systemic Inflammatory Response Syndrome(SIRS)を伴う急性肺障害に対しエラスポール®を使用した11症例を対象として、SIRS診断項目数、肺障害度、臓器不全重症度(Sequential Organ Failure Assessment[SOFA] score)と有効性との関連性を検討した。改善症例に対し、無効症例は、入室時からエラスポール使用時にかけて肺障害が進行し、SOFA scoreは使用時に有意に悪化していた(P<0.05)。多臓器不全の重症化が、有効性に影響を与える可能性が示唆された。

24 ICUで発症した緊張性気胸2例

大橋さとみ・肥田 誠治・本多 忠幸
遠藤 裕・山本 智*・小村 昇*
風間順一郎*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
救命救急医学分野
同 医学部附属病院集中治療部*

ICUで経験した緊張性気胸の2例を報告した。

症例1は肺炎患者で気管切開術後に緊張性気胸が明らかとなった。原因として、術前日の鎖骨下静脈穿刺、気管支鏡検査時の咳、気管切開術が疑われたが、明らかでなかった。胸膜癒着のため非